

## 掲載コンテンツのご紹介

平成26年度に追加しました、20本の地域映像の概要をご紹介します。実際の映像は「地域文化資産デジタルコンテンツ発信事業ポータルサイト」にてご覧頂けます。



### あおもりけん ひろさきし ごだいししまい 青森県 弘前市 五代獅子舞

青森県弘前市「五代獅子舞(ごだいししまい)」が伝えられている。由来については、五代地区内の稲荷神社境内に「獅子魂碑(ししこんひ)」があり、由来が刻まれている。また「五代鹿獅子舞の由来」なる巻物が保存会に伝えられており、獅子舞は鹿獅子の系統に属し、雄獅子、中獅子、雌獅子の他オカシコで構成され、笛、太鼓、手平鉦、胴鼓が囃子方となっている。毎年9月9日に「獅子張り(ししはり)」「獅子頭の修理をする」から始まり、旧8月15日「十五夜」に舞いが披露され、ついで10月10日稲荷神社に例祭奉納が行われる。曲目は「参進の舞(さんしんのまい)」「庭舞(にわまい)」など11曲が伝わっている。



### あおもりけん はちのへし やざわ だいぶつかぐら いちかわかぐら たかだてこまおどり 青森県 八戸市 ①矢澤・大仏神楽 ②市川神楽 ③高館駒踊

「矢澤・大仏神楽」は、尻内町(しりうちまち)矢沢、大仏地区で、毎年、櫛引(くしひき)八幡宮例大祭の御用神楽として、春と秋の大祭に奉納されている。他に、白山神社、朝日神社でも神楽が舞われている。演目は「三頭(みかしら)齒打」、「権現舞(ごんげんまい)」、「山の神」など10を数える。

「市川神楽(いちかわかぐら)」は、市川町浜市川地区に昔から伝承されてきた。毎年7月に行われる白髭(しらひげ)神社の祭典では神楽が奉納されるほか、湊町大祐(だいすけ)神社でも祭典で神楽が奉納されている。現在では地元の多賀小学校の児童が熱心に神楽の継承に取り組んでいる。演目は「屋固め」ほか10を数える。

「高館駒踊」は、旧南部藩領に伝えられ、高館地区で保存継承されている。江戸時代の文化・文政の頃、五戸町切谷内から伝えられたと言われている。演目は、馬の作りものを着けて踊る「駒踊」のほか、「七つ道具」「扇舞」「うつぎあさあ」がある。毎年8月の八戸三社大祭、9月の小田(こだ)八幡宮で奉納される。地元高館小学校児童が駒踊の継承に熱心に取り組んでいる。



### あおもりけん くろいしし にそうし 青森県 黒石市 二双子だげら舞

寛政7年11月2日、江戸時代の旅行家菅江真澄は旅行記に、この地の伏見神社にて「産土(うぶすな)祭り」が行われたと記している。「産土祭り」とは、「生まれた土地の守り神を祀る日」とされる。その一つ「だげら」は、毎年8月2日の伏見神社大祭に行われ、「太夫」と「獅子」がこの二双子(にそうし)地区の全家(103戸、平成22年)を廻り、「災いを祓い」「豊作を祈る」行事である。家の中では、神棚をまずお祓いし、台所をお祓いする。家人に病があればその痛むところを獅子に噛んでもらう。お囃子は大太鼓である。台車に取り付けられ、太夫と獅子の後を追う。

由来は、菅江真澄の記した日付や獅子頭を保存する箱に記された「嘉永七甲寅年」などから、江戸時代に始まったと推定されている。



### いわてけん おうしゅうし ひたかひせまつり 岩手県 奥州市 日高火防祭

奥州市水沢区では、毎年4月29日、日高神社例大祭において「日高火防祭」が行われている。水沢伊達氏4代当主宗景公は若いころ江戸で大火を経験、5代村景公の時には水沢でも大火が起きた。この後、佐々木佐五平が江戸に派遣され江戸火消しを習い、水沢に火消しの組織が作られた。

城下の6町に与えられた「仁」「心」「火」「防」「定」「鎮」の6文字は、「仁心をもって火防を定鎮す」と読み、火防の心構えとされた。この漢字一文字は消防の旗印とされ、日高火防祭では「町印(ちょうじるし)」として打ち囃(うちばやし)屋台、囃子屋台(はやしやたい)の先頭に並ぶ。日高神社に火防祈願(ひぶせきがん)した後、火防祈願と火防警護を目的に町を練り歩くという、300年以上続く祭りである。

昭和38年には、打ち囃の音曲が『火防祭の「屋台囃」』として岩手県無形民俗文化財に指定されている。



いわてけん たきざわし うま  
岩手県 滝沢市 チャグチャグ馬コ

『チャグチャグ馬コ』(ちやぐちやぐまっこ)は、岩手県滝沢市と盛岡市において、毎年6月第2土曜日に実施される祭りである。馬は古来より、牛と共に農耕にかかせない家畜であり、この地方独特の曲がり屋で同居する馬の勤労を感謝する意味で、年に一度祭りが実施される。鬼越倉前(おにこしろうぜん)神社から盛岡八幡宮まで約13kmの道のりを馬に付けた鈴の音を響かせながら練り歩くお祭り、この時の鈴の音から「チャグチャグ馬コ」と名が付けられたといわれている。昔この地域で生産される馬は大変な数で、村人が鬼越倉前神社に馬の無病息災を祈願するために、馬を引いて行きつ戻りつしたこと、この祭りが始まったと言われている。



やまがたけん てんどうし とど みらい ちいき たから たかだましようりよぼうだいししおど  
山形県 天童市 届け未来へ地域の宝 「高掬聖霊菩提獅子踊り」

高掬獅子踊りは、江戸初期に天童市の西隣にある中山町(なかやままち)土橋(つちはし)地区の住民が、福井県の永平寺(えいへいじ)で習ってきた踊りを高掬地区に伝えたのが始まりとされる。獅子踊りは、中獅子、雄獅子、雌獅子の合計7獅子で行われ、長門前舞(ながもんぜんまい)、雄獅子舞、中獅子舞、雌獅子舞12演目が踊られる。踊り手の他に囃子手として、太鼓打ち2人、笛吹5人、謡い手は回向(えこう)1人という様式である。毎年8月22日に、地元河上神社例大祭において、境内に獅子踊りが奉納される。また、8月の初旬には、山形市の山寺において磐司祭(ばんじさい)が行われ、周辺地域の他の獅子踊りと一緒に奉納される。磐司祭とは、昔、磐司磐三郎というマタギの頭領が山寺の開祖・慈覚大師(じかくだいし)に悟られた由来で獅子踊りが奉納されるようになった。



ふくしまけん こおりやまし いわくら ししまい  
福島県 郡山市 岩倉の獅子舞

「岩倉の獅子舞」は、毎年10月第2土曜日に、鬼渡神社(にわたりじんじや)に奉納される。江戸時代、天明の飢饉の時に、豊作を祈念して舞われたのが始めとされる。太郎(たろう)獅子、次郎(じろう)獅子、女獅子(めじし)の三匹構成で、鶏の形をした獅子頭が大きな特徴となっている。衣装はそれぞれが袴、白足袋を着けるのが特徴的で、踊り手は氏子の小学生男子が選ばれる。舞は「大縄渡り」「十戸前」「宿入り」「通下げ」「通ぐず志」「ませ=棒舞」「弓舞」「扇舞」「うき」「唄切」「神舞=噛み合い」「礼」の12演目となっており、この演目を見てもかなり特徴的なものであることが解る。因みに地名の「片平」とは、水の便が良く、しかも水害はなく、近くに平野を臨む丘陵の傾斜地がある場所を片平と呼ぶ大変素晴らしい所であるそう。



いばらきけん つちうらし つちうらしゅうへん  
茨城県 土浦市 土浦周辺のはたごしらえ

土浦市博物館の「はたおり教室」は、平成2年に始められた。以後20年以上続けられ、100名を超える受講生(伝承者)を輩出している。織物産地ではない土浦のはたおりは、農家で自家用の綿を栽培し、母から娘へと伝えられてきたもので、家事仕事として行われてきたものである。平成21年度は「木綿作り」に加え、「絹作り」にも挑戦した。昔、この地方では養蚕(ようさん)が盛んで、近くに製糸工場も立ち並び、多くの人々が蚕業を支え、また貴重な収入源でもあった。今でも土浦市周辺の数軒の農家では、養蚕の伝統を継いでいる。「はたおり教室」の卒業生で組織した「綿の実」は、蚕業技術研究所の協力と近隣の農家の指導を得て蚕(かいこ)の飼育も行った。このビデオは、はたおり教室の活動20周年の集大成として、「木綿のはたごしらえ」を中心に、絹の「座繰り」「かせ上げ」「織(おり)」を継承するため制作された。



さいたまけん ちちぶし みつみね ししまい  
埼玉県 秩父市 三峰の獅子舞

三峰神社の由緒は、景行天皇が日本武尊を東国に遣わされた折に創建されたと伝えられる関東屈指の霊峰である。「三峰の獅子舞」は当社の末社で、安産・疫病除けの神として勧請された諏訪神社の大祭に毎年奉納されている。獅子舞は三匹獅子舞で「雄獅子」「雌獅子」「太夫獅子」で構成されるが、新旧2組の獅子頭があり、舞手は6人となる。現在では8月第4日曜日に行われているが、この獅子舞は、着物に袴(はかま)、白足袋姿でゴザや畳の上で舞うのが特徴で、「お座敷さら」「御殿さら」と呼ばれる。また、静かにゆったりとした女性的な舞姿から「じよなめき」とも呼ばれている。由来は、江戸時代末期、奥多摩の日原(につばら)から伝えられたといわれ、演目は、出端(では)、花割り(はなわり)、一本花(いっぽんばな)、剣掛り等、現在は16庭(にわ)が舞われている。



さいたまけん ぎょうだし ぎょうだ ししまい の ししまい ざいけ ししまい  
**埼玉県 行田市 行田の獅子舞 ①野の獅子舞 ②在家の獅子舞**

「在家の獅子舞」は、市内南河原・在家地区に伝わる民俗芸能で、起源は定かではないが、江戸時代から伝わるという。「厄神（やくがみ）除け」「豊年万作」を祈念する獅子舞である。獅子は「法眼（ほうがん）」、「雄獅子」「雌獅子」の三匹獅子舞で、これに「面化（めんか）」「笛」「唄」「おはらい」「旗もち」「子供連」で構成される。毎年5月下旬、「厄神除け」として南河原在家地区の全戸を巡行する。8月20日頃の土曜日には、河原神社祭礼で「道節（みちぶし）」「岡崎」「入齒」「橋掛り」「お暇乞い」「レイ」が続けて演舞される。

「野のささら獅子舞」は市内野地区に伝わる民俗芸能で、五穀豊穰、疫病退散等を祈願して、毎年10月第3日曜日に「久伊豆（ひさいず）神社」「諏訪神社」「聖天社（満願寺）」「氷川神社」等に奉納されている。獅子は「法眼（ほうがん）獅子」「雄獅子」「雌獅子」の三匹獅子舞で、他に「面化」「幣束（へいそく）」「万灯」「唄」「笛」「花籠（はなかご）」等が加わる。演目は「雌獅子隠し」のみである。



かながわけん やまきたまち しらはたじんじやまつりはやし  
**神奈川県 山北町 白旗神社祭り囃子**

山北町谷ヶ地区（やまきたまちやがちく）に伝わるお囃子で、4月第1週の日曜日に実施される白旗神社例大祭で、白旗神社祭り囃子保存会（しらはたじんじやまつりばやしほぞんかい）により行われている。曲目は「いぶれ」「京囃子」「上総囃子」「宮神楽」「昇殿」「追廻し囃子」「おんがく囃子」「みあがり」の8曲があり、練行の場面に応じて曲目が変化する演奏形態を持つという特徴がある。通常、関東の祭り囃子は江戸の囃子に端を発するものが大半を占めるが、それらとは異なる曲目を伝えることから、江戸系統以外の囃子である可能性も考えられる。

また、白旗神社祭り囃子は特異な特徴をもつ囃子であると共に、かつては途絶えていた曲目を復活させるなど、保存会により、子供からお年寄りまで一丸となり伝承を守っている点でも、町の貴重な伝統芸能として評価できるものである。



ぎふけん ようろうちょう たかだまつり  
**岐阜県 養老町 高田祭**

石川県の最南端に位置する加賀市は、近世には加賀藩の支藩・大聖寺藩（だいしょうじはん）が置かれ、藩政期に形成された文化は今日に色濃く継承されている。この作品では、今に伝わる7つの伝統芸能を紹介している。

「お松囃子」は、諷刺初めの行事で、江戸期には幕府・諸大名により盛んであったが、衰退。当地では最後の藩主がこの伝統を確固たるものとしたため、弟子たちにより伝えられた。「御願神事（ごがんしんじ）」は、「菅生石部神社（すがういそべじんじや）」で、およそ1,300年前からつくづく勇壮な神事で、毎年2月10日の例祭時に行われる。壮烈な竹割りの行事と、大蛇退治に擬するという大縄の行事からなる。「シャシャムシャ踊り」は、塩屋町（しおやまち）に伝わる別名「蓮如（れんによ）踊り」と呼ばれる盆踊りである。「シャシャムシャ」は笹叢（ささむら）が語源ともいわれ、笹をかき分け御坊に参る様子を振りにしたともいう。「山中節（やまなかぶし）」は、北前船（きたまえぶね）の船頭衆（せんどうしゅう）が山中温泉で湯治の際に歌った松前追分（まつまえおいわけ）から発展したといわれている。「ごり呼び唄」は、動橋町（いぶりはしまち）で歌い継がれるわらべ歌で、川魚のゴリを捕まえるときに唄ったという。「黒崎土ねり節（くろさきどねりぶし）」は、藩政時代に遡る。黒崎町（くろさきまち）での新田開発に伴う労働歌が由来とされる。「敷地天神蝶の舞（しきじてんじんちようのまい）」は、前述の「菅生石部神社」にて毎年7月24日から26日にかけて行われる夏祭り「天神講（てんじんこう）」の際に、氏子（うじこ）の少年たちによって奉納される稚児舞（ちごまい）で14世紀には既に行われていたとも伝わる。



あいちけん とよたし いなぶ う はやし  
**愛知県 豊田市 稲武の打ち囃子**

稲武地区の祭礼では、多くの地区で打ち太鼓が披露される。天正2年武田勝頼の美濃侵攻に際し、迎え討った織田軍は中山神社の社頭で、大太鼓を打ち鳴らし、武運を祈願したと言い伝えられている。それが稲武の村々に伝わり「稲武太鼓（いなぶたいこ）」と呼称されるようになった。

「稲橋（いなはし）八幡神社祭典」大正時代初期に制作された山車は昭和に修復され、今日に受け継がれている。毎年8月の14、15日、山車に付けられた大太鼓を境内に固定し、夜半まで打ち鳴らす。子供は下段で小太鼓を打つ。主に女子中学生が巫女となり、社殿にて、神楽「浦安（うらやす）の舞」を奉納する。

「野入（のいり）神明大社大祭」毎年お盆の後の土曜、日曜日に行われ、大正4年に制作され昭和に修理が行われた山車は、地域の旧道、国道を引き廻し、打ち囃子を披露しながら練り歩く。朝から夜まで太鼓を打ち鳴らし、翌日には、菓子にくじ紙を張り付けて（昔は餅に）これを撒くしきたりがある。

「黒田（くろだ）神明社祭典」現在の山車は、大正13年に制作された二層千鳥破風入母屋（にそうちどりばふいりもや）作りという立派なもので、国道から民家の前を通り、家々の前で止まり、打ち太鼓を披露する。長い距離を引き廻すため、体力を消耗するが境内に戻っても太鼓打ちを続け、また足の振りが独特で、より一層の体力を必要とする。神事では「浦安の舞」も奉納される。



あいちけん にっしんし あかいけ きやり ちようん  
**愛知県 日進市 赤池の木遣と提燈とぼし**

日進市赤池地区では、現在も熱心に「木遣（きやり）」が保存会の皆さんを中心に唄われている。約400年前、名古屋城築城の折、近郷近在から集まった作業者たちが唄っていた作業歌を元に唄ったのが始まりといわれている。保存会は現在約50名の会員を擁し、15名の熱心な会員に依り継承されている。「せ〜のお」とか「よっしゃー」等の掛け声はこの木遣からでたものと言われている。「提燈とぼし」は「提燈祭り」ともいわれる。「とぼす」とは「とます」からきている。祭りは、明治の初期から「観音堂」で行われたというが、現在では赤池公民館で行われる。高さ15m、重さ1tの木組みの塔を立て、提燈を取り付けた五重塔は、全国的に見ても珍しい。この塔を建てる折は、絶好の「木遣」披露の場でもある。現在では小学生が、この木遣を継承しようと機会がある毎に参加している。



おおきかふ や おし おん しんじやうたつさいきょうせんぎょうじ  
**大阪府 八尾市 恩智神社卯辰祭供饌行事**

恩智神社は八尾市の恩智に所在する神社で、大御食津彦命(おおみけつひこのみこと)と大御食津姫命(おおみけつひめのみこと)を主祭神とする。その名の通り、農作物の豊作祈願に由来した行事が多い。「卯辰祭供饌行事」または「御供所神事(ごくしょしんじ)」が行われる祭礼は、11月25日に宵祭り、26日に本祭りが行われる。神社にお供えする御供(ごく)を作ることでそのものが神事であり、市の無形民俗文化財に指定されている。御供は、「御供所講(ごくしょこう)」または「御供所の社家」といわれる世襲された13家を中心に餅が2種類、団子が3種類作られる。当日は朝8時に禊(みそぎ)をし、専用の衣装を着けた関係者は拝殿に臨み、宮司からお祓いを受けると共に「ご神火」を戴き、御供所に移動して、籠(かまど)にこの火を移す。以後、斎食を戴いた後、餅と団子作りとなる。出来上がった餅と団子を拝殿脇に安置し、労いの直会(なおらい)を行い終了となる。



わ か やまけん たなべし なつせいじゅうろうおど  
**和歌山県 田辺市 お夏清十郎踊り**

「お夏清十郎」とは、1662年に播州姫路で実際に起こった事件を題材に、井原西鶴や近松門左衛門によって、読み物や人形浄瑠璃に仕立てられ、全国に伝えられた。当地、本宮町(ほんぐうちょう)土屋屋(つちごや)では、明治5年頃、城清助(じょうよしすけ)とその妻ソメがこの踊りを他所から習い来て広めたといわれている。元来この地は、筏流しの拠点として筏組(いかだぐみ)で栄えた土地であり、筏師(いかだし)をはじめ、人が集まる場所であったので、この踊りも近隣に広まったといわれている。戦前には、7月から8月にかけて長い期間踊られたようであるが、現在では、8月15日に公民館前広場にて踊られている。この伝統ある踊りを維持継承するため、子供達への指導にも力が入っている。



おおいたけん なかつし ふくしまかぐら ぶぜんかきぜかぐら うえのかぐら みやぞのらく とばるかぐら しんやばかぐら  
**大分県 中津市 ①福島神楽 ②豊前蛸瀬神楽 ③植野神楽 ④宮園楽 ⑤戸原神楽 ⑥深耶馬神楽**

「福島神楽」毎年12月に福島の菅原神社にて、午後から夜中まで奉納される。明治初期から始まったとされ、現在では「豊前神楽式十八番」と「湯立神楽」が舞われている。「豊前蛸瀬神楽」蛸瀬地区の八坂神社で奉納される。蛸瀬の八坂神社に伝わる豊前系の岩戸神楽で、33番の演目を伝承している。このうち7番が福岡県築上郡吉富町八幡古表神社から江戸末期に伝えられた「湯立神楽」で、この湯立神楽を伝承しているのは、蛸瀬神楽のみである。「植野神楽」毎年12月31日から元旦まで、植野地区の若旗神社で奉納される。伊勢神楽を源流に、豊前岩戸神楽を本流として、植野土佐守が民衆化したといわれ47番の演目がある。「宮園楽」別名「かっぱ祭り」。約300年前から伝えられてきた郷土民芸。平家の落人が当地に来て河童の姿に身を替え、災いをもたらしたので、その霊を慰めるために始まったと言われている。この神事を氏神の神前に奉納して人畜の守護や厄払い、五穀豊穡を祈願するものである。「戸原神楽」「深耶馬神楽」豊前岩戸神楽と称し、耶馬溪地方に伝わる神楽。現在では戸原神楽と深耶馬神楽および2つの神楽社がその継承に努めている。



おきなわけん おきなわし おきなわしこじや ししまい  
**沖縄県 沖縄市 沖縄市古謝の獅子舞**

沖縄県沖縄市では、毎年旧盆の翌日(7月16日)に厄払い、火難除け、病魔除け、五穀豊穡を祈って、獅子舞が行われる。演舞は、まず古謝獅子舞保存会の「古謝翔龍太鼓(こじやしやうりゅうたいこ)」から始まり、ホラ、ドラ鐘に移り、三線(さんしん)が加わって、赤獅子、白獅子が登場、一つの毬を取り合う等獅子舞が行われる。最後には、観衆も舞台にて沖縄独特の踊りの輪を作る。演目他詳細についての解説はなく不明。演舞が終了すると、再び祈りを捧げて終了する。



おきなわけん なきじんむら こうりじまかみがみ まつ  
**沖縄県 今帰仁村 古宇利島神々の祭り**

宇利島(こうりじま)は、沖縄本島北部の本部半島の北東に浮かび、人類発祥の伝説が語り継がれる聖なる島である。古来、神人(かみんちゅ)達により多くの祭りや年中行事が行われてきた。①「旧正のウガン」旧暦の元旦、早朝から新年の祈願をするため「旧正のウガン」が始まる。島の人々はお宮に集まり、供え物を捧げてウガンをする。②旧4月「ムシバレー」害虫たちが島から出ていくように祈る行事。集めてきた虫を芭蕉で作った舟に乗せ、神人達が東の浜で海に流す。③旧4月20日「ブーチウガン」疫病やはやり病を防ぐ祈りである。お宮から始まり、比謝屋(ビジャヤー)、ヌルヤー他でウガンをする。④旧4月吉日「タキヌウガン」早朝、神人達がお宮に集まり、「タキヌウガン」の始まりを告げる。村の安全と五穀豊穡を願いながら、「ナナムイ・ナナタキ(7つの森と御嶽の意)」を廻って祈願します。他に本編映像では⑤「カミサガイ(神下り)」、⑥「ユニゲー」豊穡願う祭り、⑦「サーザーウェー」害鳥とされた鷺を追い払う祭り、⑧「ピローション」イルカ漁を神人が演じることで豊漁を願った祭り、⑨「ウンジャミグワー」、⑩「ウンジャミ」、⑪「豊作祭」と続く。



おきなわけん もとぶちょう さともとぶ びせ ききもとぶ いのは  
沖縄県 本部町 シヌグの里本部 —備瀬そして崎本部・伊野派—

沖縄県の本部半島の備瀬を始めとするこの地域では、旧7月16日～26日の3～7日間に「シヌグ」といわれる村落祭祀が行われる。これは祖神アマミクの渡来と稲作の豊穰を祈る祭りである。由来は定かではないが、備瀬の集落全域が貝塚であり弥生時代から人が住んでいたとされることから、かなり古くからこうした行事が行われていたとされる。シヌグ祭りの初日は神迎いの「ウプユミマー」から始まり、「ヌル(祝女)」「ニガミ(根神)」「イガミ(居神)」などのカミンチュ(神人)が祭りの開始と無事を祈ることから始まる。

シヌグ(又はシヌグイ)では、かつて多くの歌がうたわれたが、現在では「打豆節(うちまみぶし)」「天の群星(ていんぬぶりぶし)」「くびる並松節(なんまち節)」「はんた巡り節(めぐいぶし)」など7曲ほどとなった。旧7月26日の最終日は「タムトノイ」があり、アサギで神人はシヌグの無事終了を神に報告、感謝し祭りを終える。